

備える3.11から

第15回 避難所の誕生②

難題 みなで知恵絞る

宮城・石巻の洞源院

東日本大震災では避難所指定され... 洞源院も、一つ、災害を想定し...



洞源院の住職、小野崎秀通さん



洞源院の八カ条
一、みんなを元気づけあいさつをしよう。
二、履き物を整え、常に整頓・整頓・清潔に心がけよう。

約束事守り 深めた絆



避難所となった洞源院の一日
「誰かの困りかみ、望んで帰りたい」と、初めの食料配給は...



避難所でも一緒にお経を唱えた朝のお勤め＝5月、洞源院で

増える「下水道式トイレ」

東海地方の各自治体での避難所が通れない約千が百聞食へも災害に備え、避難所を確保する...



和室の奥に設置された洋式トイレは使えぬ。和室はトイレとして使用し、洋式トイレは緊急時に使用。

もう、家はあきらめた

「家に入った途端、舞い上がってしまうよ」。一時帰宅をした知人にそう聞かされていた光一さんと幸さんは、自宅から荷物を持ち出す際の手順を何度も確認しあった。1日の一時帰宅。2人は打ち合わせ通り位牌のある1階の仏間に向かった。ところが、想定外の事態に見舞われる。位牌が、

地震で倒れたとみられる仏壇の下敷きになっていたのだ。仏壇を持ち上げ何とか回収したが、「思った以上に時間を食い、動転してしまった」。

梨奈さんと沙也加さんに託されたメモの品々を探そうと2階の子ども部屋に上がったが、思うように見つからない。アルバム、制服、教科書…。最後は手当たり次第にスーツケースに押し込んだ。

「結局、持ち帰れたのは位牌と子どもた

原発1号機からの避難
いつの日か

—15—

ちの持ち物だけでした」。予定の2時間はあっという間に過ぎ、2人の累積の放射線量は50%を超えた。

一時帰宅者に乗せた帰りのバスは行きとは打ってかわり、沈黙に包まれた。食事を済ませるとようやく声が上がった。誰かが言った。「もう、家はあきらめた」。光一さんと幸さんもうなすいていた。

仮設住宅では、梨奈さんと沙也加さんが2人の帰りを待ちわびていた。思い出の品

々を再び手にすると、歓声を上げた。幸さんは涙が止まらなかった。「娘たちが喜んでくれたのが唯一の救いでした」。長い一日が終わろうとしていた。

【はなわさん一家】原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(43)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、会津若松市に移った。長女梨奈さん(18)は東京で大学生生活。